

## 7. 知的障害者の歯周疾患管理に関する縦断研究

○澤田 圭子, 藤井 健男, 河合 治,  
森 真理, 加藤 幸紀, 横田 光弘,  
室 三之, 山本 卓生, 井上 真希,  
加藤 賀史, 富岡 純, 宮武 里嘉,  
野中 浩嗣, 吉田 拓司, 山本 友哉,  
本庄 健一, 中島 啓介, 小鷲 悠典  
(北海道医療大学・歯科保存学第一講座)

(目的) 知的障害者の口腔の健康管理は、重症者にみられる運動障害などの他、十分な治療体制の確保が難しいことから健常者に比べて立ち遅れがちである。

本研究は、知的障害者の歯周組織の健康を維持する実践的な方法を確立する目的で、施設の生活指導員と協力した口腔清掃指導を行い、その有用性を検討した。

(対象者および方法) 対象者は知的障害者更生施設に入園している有歯顎の成人30名(平均31.3歳)とした。

まず、施設の生活指導員に口腔の健康の重要性を認識してもらうために、指導員に対してモチベーションと口腔清掃指導を行った。指導員は毎日、入園者に口腔清掃の指導や介助を行った。

その後、入園者に対して口腔内診査および口腔清掃指導とスクレーリングを中心とした治療を6ヶ月毎に行った。診査はプラーク付着率(PCR)、歯肉炎指数(Modified GI)、4mm以上の歯周ポケットの出現率(Po.R)、喪失歯

数について行った。このプログラムを18年間継続した。

(結果) Modified GIは初診時1.47から83年には0.48に減少し、その後概ね0.8を維持した。PCRは初診時75.8%から83年には47.2%に減少し、その後概ね60.4%を維持した。Po.Rは初診時13.0%から83年には5.3%に減少し、その後概ね7.7%を維持した。

一人あたりの年平均喪失歯数は0.09本であった。18年間歯を失わなかった者は56.7%であった。

(考察) 施設の生活指導員が口腔清掃の重要性を認知した上で入園者に対する指導や介助を行い、さらに歯科医師による定期的な指導とスクレーリングを行う方法は、歯周組織の健康を長期間維持し、予防上大きな効果があることが示唆された。長期に渡る本研究では、指導員の退職等による口腔清掃指導力の低下が認められる時期もあり、モチベーションの強化法や、対象者のさらなる高齢化への対処法も検討する必要がある。

## 8. 金属接着性プライマーを用いた接着ブリッジの10年経過症例と脱落例

○日景 盛, 広瀬由紀人, 澤田 教彰,  
木村 和代, 坂口 邦彦  
(北海道医療大学歯学部歯科補綴学第二講座)

貴金属接着性プライマーを用いた接着ブリッジの臨床経過を調べ、脱落などを生じた接着ブリッジの考えられる原因やその対策について検討した。

対象とした接着ブリッジは本学付属病院で1989年から1998年までに装着した症例である。調査可能であった27名に施された29の接着ブリッジについて剝離や脱落を調べた。ブリッジ装着時に使用した材料はV-プライマーと金銀パラジウム合金、陶材焼付用金合金、そしてスーパーボンドであった。

接着ブリッジの装着時の接着方法は、ブリッジ被着面を粒度50 $\mu$ mのアルミナで5気圧30秒間サンドブラスト処理をし、圧搾空気で余剰のアルミナを除去した後、V-

プライマーをスポンジで塗布する。エナメル質には通法に従いリン酸で30秒間処理した後、水洗、乾燥してスーパーボンドでブリッジを装着した。

その結果、脱落しなかったものは29例中22例で、10年以上維持されているものが数例でできた。また脱落したものが7例で、その多くは2年以内に脱落していた。6年未満の1例は歯の破折によるもので、8年未満の1例は銅をほとんど含まない陶材焼付用合金の場合であった。V-プライマーの接着効果は、金銀パラジウム合金に比べ銅を含まない金合金の方が劣るものと考えられる。

したがって、金銀パラジウム合金を用いた接着ブリッ

ジについてはこのV-プライマーが有効であると考え  
る。そして脱落例を鑑みると、①ピンホールなどの付与、  
②接着面積をできる限り大きくする。③動揺歯には応用  
しない。④銅を含まない合金には使用しない。⑤口腔内

の金属には直接応用しないなどの対策を講じることに  
よ、多数の長所を持っている接着ブリッジの脱落率を少  
なくすることができる。と考える。

## 9. 北海道地区の口腔インプラントに関するアンケート調査

○越智 守生, 広瀬由紀人, 坂口 邦彦,  
白井 伸一, 松本 弘幸, 加々見寛行,  
八島 明弘, 鳴野 隆博, 神成 克映,  
國安 宏哉, 山崎慎一郎, 木村 和代,  
松原 秀樹, 栗田 宅哉, 富田 達洋\*,  
永山 正人\*, 三嶋 顕\*

(北海道医療大学歯学部歯科補綴第二講座, \*北日本口腔インプラント研究会)

【目的】現在, 口腔インプラントの臨床は確立され, 種々の教科書や学術雑誌などから多くの情報を得ることが可能である。しかし, 日常臨床におけるインプラント治療の実態については, いまだに報告が少ないように思われる。そこで今回, 北海道地区におけるインプラント臨床の実態を調査する目的でインプラント臨床の環境, 材料, 方法などに関してアンケート調査を実施した。インプラント臨床の実態の把握は, これからの基礎的ならびに臨床的研究に対する指針になると思われる。

【方法】今回のアンケートは, 北海道地区でインプラント臨床を日常の診療で行っている歯科医師が所属すると思われる北日本口腔インプラント研究会の全会員の134名を調査対象とした。方法は一連のインプラント臨床に関する質問用紙を郵送し, 回答記入後に返送してもらう郵送調査法を実施した。

【結果と考察】アンケート調査の有効回答は合計44通,

回答率は33%であった。アンケートの結果から「日常の診療で使用するインプラントの種類」で最も多い回答は1種類の28%, 次が3種類の21%であった。「使用頻度が多いインプラント」で最も多い回答はAQBの24%, 2番目がITIの18%, 3番目がカルシテックとパラゴンの16%であった。上部構造の使用材料は, 前装材料にポーセレンを使用している回答が硬質レジンよりも多かった。部位別においては, 前歯部でポーセレンの使用が多く, 小臼歯部ではポーセレンの使用がメタル単独(前装なし)を使用材料とする回答よりも多かったが, 大臼歯部では反対にメタル単独の回答が多かった。また, 固定方法はセメント合着が最も多く, 次に術者可撤式(スクリュー固定), 仮着の順であった。この結果より, 現在のインプラント臨床は機能の回復と同時に審美性の回復がより重要視されるようになってきていると思われる。

## 10. スポーツ選手に対するオーラルヘルスプロモーション

○石島 勉, 平井 敏博, 久保田 光,  
池田 和博, 越野 寿, 横山 雄一,  
飯田 一彦, 高田 英俊, 松実 珠千,  
片岡 洋, 中野 健治

(北海道医療大学・歯・歯科補綴学第一講座)

【目的】スポーツ選手がベストパフォーマンスを発揮するためには, 全身あるいは身体の各部に疾病や障害が無いことはもちろんのこと, 日常生活ならびにスポーツ活動を支障なく行える身体的ならびに精神的な健康の確保

が不可欠である。この観点から, 近年, スポーツ選手における全身の健康管理の重要性について, 選手ならびに関係者の意識が高まりつつある。しかし, 顎口腔系に関しては, 多くの選手がその健康管理の重要性を認識して